

# 「身近な他人」信頼

## 支援の現場から ①

### 身寄りなき 社会

#### ■「心配ない」

「戒名はいりませんか」。  
男性が首を振る。「延命治  
療をしてほしいですか」。  
男性は再び首を振った。

つくば市学園の森の特別  
養護老人ホーム「新つくば  
ホーム」で4月、70代の車  
椅子の入所者男性に、高齢



者等終身サポート事業者  
「しんらいの会」の青木規  
幸理事長(55)が書類を示  
し、意向を一つ一つ確認し  
た。施設職員が立ち会った。

「私たちは家族のような  
支援をします。契約に向け  
て進めていいですか」

青木さんが念を押した。

後日、弁護士立ち会いの下  
で男性との契約を結んだ。

男性は「何も心配はない」  
と一言だけ口にした。会員

にとって同会は、頼れる  
「身近な他人」のような存  
在だ。

男性は脳梗塞で半身まひ  
の後遺症があり、高次脳機  
能障害を負う。最重度の要  
介護だ。意思疎通はでき  
るが、口数は少ない。

息子と妻がいる。ただ、

身元保証人でもある息子は  
遠方に移り、妻の所在に至  
っては施設側もはっきりつ  
かめていない。

男性の財産管理を同会に

施設職員(手前左)が立ち会  
い、入所者男性(同右)に契  
約内容を説明する青木規幸(左  
ん)つくば市学園の森

## 終身事業、施設も負担減

担ってもらおうと、施設側  
から相談した。これまでも  
男性のような身寄りのない  
入所者が、同会の会員にな  
っている。

#### ■「陰の労働」

「おひとりさま」を巡っ  
ては、受け入れる施設側も  
悩みながら対応してきた。

入所する高齢者は持病を  
抱え、病院にかかることも  
少なくない。入院時は病院  
側から「代理人」を求めら  
れた。アメニティーグッズ

も購入し、施設が立て替え  
た。通院に付き添うことも  
あった。こうした通常業務  
の範囲を超えた「シャドー

ワーク」は、現場の負担が  
重く、大きな課題となっ  
ている。

入所者の入院時に、書類  
に自分の名前をサインした  
職員は「仕事とはいえ、自  
分の個人情報を書くのは精  
神的にも負担が大きかつ  
た」と振り返る。人手が手

薄な夜間帯に病院へ付き添  
えば、介護の質にも影響が  
出かねない。

同会は、会員の口座を管

理し、日常的な備品の購入  
から医療費など、さまざま  
な支払いも代行する。本人  
が亡くなれば、遺体を引き  
取る。

田村隆司施設長(57)は、  
高齢者終身サポート事業に  
ついて「本人が亡くなって  
も疎遠の家族を探す必要は  
なく、全てお任せできる」  
と利点を挙げる。心理的に  
も施設を利用しやすくなる  
入所者側と、介護業務に専  
念できる施設側。互いの安  
心感につながっている。

(この連載は取手龍ヶ崎支  
局・斉藤明成が担当しまし  
た)

### 御船祭祝う光の競演

鹿嶋・北浦湖畔

第46回鹿嶋市花火大会が4日、同市大船  
津の北浦湖畔で開かれた。湖上の台船から  
約1万発が次々と打ち上げられ、来場者た  
ちは迫力ある光の演出に見入った。

大会は例年秋に開かれていたが、今回は  
9月に12年に1度の鹿島神宮の御船祭が開  
かれることから、時期を前倒し、「式年大祭  
御船祭記念」と銘打って機運醸成を図った。

会場では大玉108連発や超特大水中ス  
ターマインが夜空と水面を鮮やかに彩っ  
た。御船祭の舞台でもある鹿島神宮一の鳥  
居と花火の競演に、会場からは大きな歓声  
と拍手が上がった。

(村田知宏)



約1万発が湖上を彩った式年大祭御船祭記念鹿嶋市花火大